
続、小説・人狼ゲーム（出題編）

iris Gabe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続、小説・人狼ゲーム（出題編）

【Nコード】

N7187K

【作者名】

iris Gabe

【あらすじ】

銘々が生きのこりをかけて、互いの正体をさぐり合う人狼ゲーム。心理的なかけひき、攻防が交叉する中で、あなたは冷静な行動を選択することができるだろうか？

前回の「小説・人狼ゲーム」をさらにグレードアップした続編であり、読者への挑戦状を掲載した本格推理小説。

名も無き村（前書き）

本編は、前作「小説・人狼ゲーム」の続編です。本編では前作よりもさらにルールを複雑にして話が進行します。本編のルールを理解するためにも、前作をお読みになることが役立つと思います。また、本編には前作のネタばらしも一部含まれております。まだ前作をお読みになっていない読者の方は、まず前作からお読みいただくとありがたいと思います。

登場人物

アイリス	(I)	若い女性
ミスズ	(M)	司会者（若い女性）
アメンボ	(A)	青年
ボス	(B)	老人
チイ	(C)	少女
ドロシー	(D)	少女
エリカ	(E)	若い女性
フォックス	(F)	年齢不詳の男性
グレイ	(G)	中年男性
ヒミコ	(H)	美人
ピースケ	(P)	青年
クイーン	(Q)	中年男性
リヨウタ	(R)	少年
シノ	(S)	老女

名も無き村

私の眼下には翡翠色の広大な森と、曲がりくねった美しい川、深い山並みが広がっている。そして静かな森に取り囲まれて、ささやかな集落がそこにあった。名も無き村……。周囲から孤立して独自の生活を営む、慎ましくて、のんびりとした平和な山村だ。

ある日この村に一人の旅人がやってきた。村人たちはころよく旅人をもてなした。旅人がやってきた最初の日、特にこれといった事件は起こらなかった。二日目の夜――それはかつてないほど艶麗な満月の夜であった。やがて夜も更けて、月は沈み、太陽が山間から顔を出した。

いつも畑仕事をしている村一番の早起き老人の姿が、今朝はなかった。心配をした村人たちが老人の家の前に集った。しかしそこで彼らが目撃したのは想像を絶する凄惨な光景だった。

老人の遺体には内臓がほとんど残っていなかった。あんなにやせ細っていた老人から吹き出た大量の血しぶきの臭いが部屋中に充満していた。

さらに翌朝になると犠牲者は二人に増えた。村はずれに一人で暮らす孤独な農婦と陽気な床屋の二番目の息子が、見るも無残な姿で死んでいるのが発見されたのだ。そして昨晩は、さらに村長を含む四人が猟奇的な殺人鬼に惨殺されてしまった。

ようやく、村人たちは気づいた。彼らはあの旅人が泊まっている小屋の前に集結した。やがて村人の代表がいった。

「旅人さんよ。あんたしかいねえ。この惨劇を引き起こした張本人は……」

旅人はあえて弁明をしようとはしなかった。村人たちは旅人を取り囲むと容赦なく集団暴力リンチを行った。やがて息を引き取る間際になって、ようやく旅人は口を開いた。

「ふふふつ、これで済んだと思うなよ……。すでにお前たちの中に

は呪われた狼族の血に汚された人物が三人紛れこんでいる。俺を殺しても悲劇は再び繰り返すのだ。はっはっは……」

旅人は不気味な予言を残して息を引き取った。恐怖に怯える村人たちは互いに疑心暗鬼になってしまった。彼らは急きよ会議を開いて、夜間は信頼のおける者同士で複数になって寝泊りすることを取り決めた。

その会議に集った村人全員の人数は十三人だった。そしてその中にはこの私も含まれている。くくくっ……。いよいよ面白くなってきたぞ……。この名も無き村において、臆病で体力に劣る人間どもと、野蠻で知力の低い人狼どもが血みどろの抗争を繰り広げる。馬鹿どもによる無益な争いの末に、どちらか片方の陣営が滅んだ時こそ、我ら妖狐族の長年の悲願が成就されるのだ！ 人間か人狼、どちらか一方の勢力だけになってしまえば、奴らに乗っ取るのはいとも容易いことである。誇り高き我ら妖狐族の繁栄の時代が、間もなくはじまろうとしている。私は密かにほくそえんだ。

汝は人狼なりや？

I 「こんばんはー。師匠、ご無沙汰してました」

M 「あら、アイリスさん。久しぶりね」 ミスズはチャームिंगな碧い眼の若い女性だ。彼女はネット仲間で定期的に人狼ゲームを開いて楽しむグループ『朧月会』のリーダーでもある。

M 「今晚も人狼ゲームを催しますよ。よかったら参加してくださいね」

I 「はい、そのつもりでやってきました」 間髪を入れず私は答えた。

M 「今日はアドバンストルールで行う予定なの。アイリスさんはアドバンストルールをご存知かしら？」

I 「はい、師匠。全然わかりませーん」

M 「でしょうね……。じゃあ、今から説明するね」

I 「お願いします」

M 「基本的にはスタンダードルールと同じです」 ミスズが説明をはじめた。

スタンダードルールについては、小説・人狼ゲーム（知識編）に記してあるので興味を持たれた読者の方は参考にしていただきたい。なお、本編を楽しんでいただくためには、やはりルールをしっかりと把握されることが大切と思われる。

M 「大きく違う点は、人狼、狂人、祈祷師、牧師、村人のほかに新しい役割として、妖狐と霊能者が加わります」

I 「妖狐って？」

M 「妖狐は人狼側にも村人側にも属さない第三勢力よ。人狼側と村人側の二つのチームが勝利を争う中で、息を潜めて単独勝利を目指す孤独の戦士よ」

I 「どうすれば妖狐が勝利となるのですか？」

M 「スタンダードルールでは、人狼側は終了時刻までに村人側を全滅させれば勝利。村人側は全ての人狼が死んでしまうか、あるいは

終了時刻までに村人側の誰か一人でも生き残れば勝利だったわよね」

I「はい、そうでした」

M「アドバンスルールでは、スタンダードルールにおけるどちらかの陣営の勝利条件が達成された時にもし妖狐が生き残っていたならば、妖狐がたった一人だけの勝者となります」

I「妖狐が最後まで生き残ったら、妖狐一人だけが勝者になってしまふ……」

M「そう、妖狐は村を妖狐族の支配下にしようと企んでいるのよ」

I「じゃあ、妖狐はどうしたら死んでしまうのですか」

M「妖狐は人狼に噛まれると、ただの狂人に成り下がって人狼側のメンバーとなります」

I「狼さんに襲われた瞬間に、妖狐としての能力を失っちゃうというわけですね」

M「そのとおりよ。噛まれると狼族の手下になってしまふのよね。だから噛まれたあとでは、最後まで生き残っても単独勝利にはならないわ」

I「あくまでも、妖狐として生き残らなければ単独勝利はないというわけですね」

M「そう。噛まれたあとは人狼側の勝利を目指して行動するだけね」

I「狐さんは噛まれてしまえば狂人になるんですね。じゃあ、人狼側のために自殺することもできるんですね」

M「できるけど、狂人と化した妖狐の勝利条件は、人狼側が村人を全滅させた瞬間まで生き残っていないければならないの。だから、自殺してしまうと勝利を放棄してしまうことになるわね」

I「ふむふむ。狂人になっても、死んだら即敗北という妖狐のサガは背負っていかねばならないんですね」

M「だから狂人化した妖狐が自殺することはまず考えられないわ……」

I「じゃあ、そんな狂人は人狼側として役立たずじゃないですか。さっさと殺しちゃえー、てことにならないですか？」

M「そうね、殺しちゃってもいいけど、人狼側としては狂人化した妖狐は、自分たちだけが狂人であることを把握している便利な仲間でもあるのよ。集団暴力投票もあるし、生かしとけばなにかと役に立つと思うけど……」

I「なるほどね。人狼側としてはなるべく早く妖狐を見つけ出して、手下にしたいところですね」

M「そうなの。でも妖狐を見つけるのってかなり難しいことよ」

I「村人側からは、どうやって妖狐を退治するのですか？」

M「もちろん、集団暴力で吊るし上げる方法もあるけど、霊視で妖狐を殺すこともできるわ」

I「霊視？」

M「追加されたもう一つの職業の霊能者だけど……、あつ、霊能者は村人側の職業ですよ。霊能者は全ゲームをとおしてたった一回だけ、夜の同居人の一人を霊視することができます」

I「たったの一回ですか？」

M「そうよ。そこでもし霊視された相手が妖狐だったら、妖狐は正体を見抜かれたということで死んでしまうの」

I「うわー、正体がばれた途端に死んでしまうんですか！　じゃあ、霊視した相手が狐さんではなかったら……？」

M「それでおしまい。霊能者は霊視する能力を失って、そのあとは村人側の一員として行動していくの」

I「霊視された相手も、自分が霊視されたことがわかるんですね」

M「そうね。うっかり狼を霊視してしまうと、その霊能者は人狼側のターゲットになってしまうわね」

I「なるほど。霊視はたったの一回だけの能力だから無闇には使えませんねえ」

M「霊能者の能力はそれだけじゃないの。霊能者は毎朝、つまり昼の会議の前に、前日の集団暴力の犠牲者がいたならば、その人の職業を知ることができるの。実際にはゲームマスターから秘密会話で報告を受けるんだけどね」

I「ええっ、それって他人の役職を知る上で、めっちゃ大きなアドバンテージですね！」

M「そうなの。だから、人狼側としてはいち早く見つけ出して殺してしまいたい職業よね」

I「昼の会議で、前日までの集団暴力^{リンチ}の犠牲者の職業を霊能者が暴露しちゃえば、ゲームが面白くななくなっちゃいませんか？」

M「問題はその人が本当に霊能者かどうか判断できないことよ。狂人が嘘をついているかもしれないしね。それに、のこのこ霊能者がしゃしゃりであれば、すぐに人狼たちのターゲットになってしまうわ」

I「そっかあ。霊能者としては、しばらく様子を見ていたほうがいいということですね。奥が深いわ……」

M「そのほかのルールの変更点は、一つは初日の部屋割りが三人部屋を優先して行うことね」

I「よくわかりません……」

M「ええと、例えば参加者が十三人とするわね。その時には、部屋割りを三人、三人、三人、二人、そして余った二人というように割り振っていきます」

I「二日目以降は従来どおり？」

M「そうです。だから初日だけ三人部屋が多くできることになるわね」

I「はいはい、ほかに変更点は？」

M「そのくらいかな？ あっ、そうそう。前回と違って今回のゲームでは集団暴力投票^{リンチ}で票が割れた時に、もう一回だけ決選投票を行います」

I「決選投票？」

M「同票数を得た最多得票者のみを候補にして、もう一回だけ投票を行うの。その時に、必ずしも前回と同じ人に投票しなければならぬという決まりはありません。そこで最多得票者が出ればその人は吊るされるし、票が再び割れた時にはその日の集団暴力^{リンチ}は中止し

ます」

I「わかりました。結局、大きな変更点は妖狐と霊能者が加わったということだけですな」

M「そうなんだけど……、それってかなり複雑なのよ。もう一回要点を繰り返すわね。妖狐がもし噛まれずに最後まで生き残れば、単独勝者です。その時は、人狼側も村人側も敗北です。妖狐がもし人狼に噛まれれば、狂人と化して人狼側に所属します。狂人化したあとで再び人狼に噛まれれば妖狐は死んでしまいます。もし最後まで生き残ってかつ人狼側が勝利を収めれば、人狼側といっしょに勝者になります。ゲームの途中で死んでしまえば、いかなる場合にも妖狐は敗者です。霊能者は毎朝、前日の集団^{リンチ}暴力の犠牲者の職業を知ることが出来ます。さらに、霊能者は全ゲームをとおして一回だけ、同居人の一人を霊視することが出来ます。霊視された相手が妖狐の時には、妖狐は死んでしまいます」

I「細かい質問だけど、妖狐が狂人化したあとで霊視されたらどうなっちゃうんですか？」

M「あんだ、時々ものすごく鋭くなるわね……。たとえば狂人化したあとでも霊視されれば妖狐は死んでしまいます」ミスズは感心していた。

I「わかりましたー。師匠、ばっちりです！」

M「じゃあ、ゲーム会場に行きましょう。みんな集まっているわよ」

初日の出来事

初日の夕刻

M「こんばんは。お集まりの皆さん、長々とお待たせして申し訳ありません。ただ今より人狼ゲームを開催いたします」ゲームマスターのミスズが台上で宣言すると、参加者たちから一斉に歓声が沸き起こった。

M「本日はアドバンスルールで行います。では……、ここは名も無き村——、ここにいる村人は全部で十三名。しかし、皆さんの中には村を滅ぼそうとする恐ろしい魔物が紛れこんでいます。魔物の数は、人狼が三人、妖狐が一人、であることが判明しています。村人を救出する狩人たちの到着時刻は八日目の夕刻です。今回は集団^{ンチ}暴力投票が同数で割れた時に、決選投票を一回だけ行うことにします。それでは、皆さんあらゆる知恵をふり絞って生き残りをはかってください」

本編のゲーム参加者は、前回のメンバー、アメンボ(A)、ボス(B)、チイ(C)、ドロシー(D)、エリカ(E)、フォックス(F)、グレイ(G)、ヒミコ(H)、アイリス(I)に加えて、ピースケ(P)、クイーン(Q)、リョウタ(R)、シノ(S)の総勢十三名だった。偶然とは恐ろしいものだが、今回の参加者のイニシャルも、AからIと、PからSまでの連続したアルファベットになっていた。

例のごとく私はゲーム内容をメモするためのノートを用意して、参加者の名前をアルファベット順に書きこんだ。人狼ゲームは、部屋割りを決める時の状況や、昼の会議での発言、集団暴力投票の結果などが勝敗を大きく左右することになる。釈迦に説法ではあるが、読者の皆さんにもメモを用意されてお読みいただくことをお勧めする。

M『アイリスさん、聞こえますか?』秘密会話を通してゲームマスターのミスズから連絡が入った。

I『はい、師匠、よく聞こえてます』私は返事をした。

M『アイリスさんの今回の役職を連絡しますね。アイリスさんは……』

I『はい……』私は息を呑んだ。

M『人狼です!』

ミスズの連絡に私は呆然とした。人狼……。よりによって……。

もちろん、私にとって未知の職業だ。一体なにをすれば? それに、仲間の人狼は……?

読者の皆様にあらかじめお断りしておく。人狼ゲームでは会話の手段が二種類ある。一つは普通のオープンな会話で、近くにいる誰もが会話の内容を知ることができる。それに対して秘密会話なるものがある。これは選んだ特定の人物たちだけの間で交わされる会話で、部外者は会話の内容を盗み聞きすることはもちろん、秘密会話が行われていることを察知することもできない。全ゲームをとおして秘密会話の使用が許されているのは、ゲームマスターとの間のやりとりと、人狼同士の秘密会話のみである。人狼同士はゲームの途中のいかなる時にも、他の人狼との秘密会話の交信が許可されている。ただし、人狼も死んでしまえばその瞬間から、仲間との会話は一切禁止される。

なお本編では、通常のオープン会話は普通の鍵括弧（「、」）で表現して、秘密会話については二重の鍵括弧（『、』）を用いることとする。

しばらくすると、また誰かから秘密会話の交信があった……。恐る恐る私は受信した。

C『こんばんはー。あいちゃん、お久しぶりです!』聞き慣れた声だ。

I『あらー、チイちゃん! どうしたの?』

C『あいちゃん、今回のゲームでは、私たちお仲間です!』

チイは前回のゲームでも共に活躍した私の友達だ。まるで不思議の国から飛び出したかのような、かわいらしい少女だ。

I 『本当！ わーい、チイちゃんよかったね』

C 『……』

I 『どうしたの。チイちゃん？』

C 『あつ、あいちゃんといっしょなのは、嬉しいんですけど……』
チイはなぜか元気がなかった。

I 『えーと、人狼は私たち二人だけ？』 私は話題を変えてみた。

C 『あつ、もう一人いますよ』

I 『誰、誰……？』

C 『そ、それがね……』 チイが口ごもった。

G 『はーい、アイリスさん、ご無沙汰しています。グレイです』
まだどこかで聞き覚えのある声だった。

I 『えー、ひよっとしてもう一人の狼さんってグレイさんなの？』
私は驚いて叫んだ。

G 『はい、前回もチイさんと私が狼でしたよね。だから、ミスズさんに今回は間違いじゃないかと問い正してみたのですが、サイコロでこうなつたと……』

C 『私……良い子でいたいのに、また狼さんだなんて……。えーん、ついていないですう』 チイが嘆いた。

I 『チイちゃん、そんなことでも悩んじゃうのね……』 私はチイが元氣のない理由に気がついた。

G 『案外、チイさんって、狼に向いていると思いますよ……』 矢庭にグレイが口走った。

C 『そんなぁ。グレイさんひどいですう』 チイが泣き出した。

I 『そうよ、グレイさん。チイちゃん本気で悩んでいるんだから！』

G 『あらら、すみません。そんなつもりでいったのではなくて……、
実は前回のゲームの直後に、参加した男性陣たちが集まって青猪亭
ブルーボア
で飲んでいたんですよ』

I 『青猪亭って、ネット上のあの酒場？』

G『はい。リアルでお酒を飲みながら、ネット上で語り合うのです。これが結構楽しくてね……』

I『良い子は決してまねしちゃいけないことですね……』私は頷いた。

G『そこでの議論で、どの女の子がタイプかという話になりました、チイさんは断突の一位でした！　ですから、仮にチイさんに狼の嫌疑がかかって、チイさんのファン倶楽部のメンバーがこぞって吊るし上げからチイさんを守ることでしよう。かくいう私もチイさんの熱烈なファンでして、これからは私めのことは下僕とお呼びください』

C『なっ、なにをいってるんですか？』チイは顔を赤らめた。

I『ねえねえ、 그레이さん。あたしの評判はどうだったの……？』興味津々で私が訊ねた。

G『アイリスさんは、なんというか。天然で……、いや、そのお、好みが大きくわかれちゃったね……。でも、実はボスさんが熱狂的なアイリスファンですよ。あの参り様は尋常じゃなかったですね』

I『氣をつけます……。あっ、フォックスさんは？』

G『彼が狙っているのはリーダーですよ』

I『リーダー？』

C『ミスズさん』

I『あっ、なるほどね。あり得るわ……。』私は納得した。

G『彼はリーダー一筋です』

I『あはは、相当人間関係がこじれていますね』私は苦笑いをするしかなかった。

M『皆さん。各プレイヤーへの役職連絡が終了しました。いよいよゲームをはじめますよ』ミスズの声が響いた。

今回の参加者はなんと総勢十三名――。虚実のかけひきが交叉する中、生き残りをかけた血みどろの戦いの幕が切って落とされた。

M『それでは今から部屋割りを行います。初日だけ部屋割りは三人、

三人、三人、二人、二人と分けますからご注意ください」

私たち人狼チームは、急きょ秘密会話で相談をはじめた。

I 『部屋割りの作戦はなにかありますか？』

G 『チイさん……、ではお願いします』

I 『あのねえ、グレイさん。あなた男でしょうが！』私がつっこみを入れたが、

G 『私はチイさんの下僕ですから、なんなりとご命令を……』グレイは平然としていた。

C 『まず、二人部屋に私たちがいっしょに泊まれるチャンスがあれば、積極的に二人部屋になりましょう。三人部屋に二人の人狼は最悪です！ 三人部屋で、三人がいっしょに泊まれればそれが一番理想ですけどね』

I 『ええい、めんどろくさい！ 折角最強キャラの人狼さんになれたんだから、噛み捲くっちゃえばいいじゃん』我慢できずに私が反論した。

C 『あいちちゃんの作戦もいいと思います。ただ、今回のゲーム終了時刻の八日目夕刻という期日がかなり遅いので、ゆっくりと様子を見るという選択肢も私たちは取れます。臨機応変にいきましょう』

I 『了解です』

G 『了解です』こうして私たちの相談は終了した。

いよいよ初日の部屋割りが行われる。静寂を破ってミスズが発言した。

M 「部屋割りの指名順を発表します。リョウタさん、ドロシーさん、ピースケさん、ヒミコさん、グレイさん、フォックスさん、アイリスさん、エリカさん、アメンボさん、チイさん……の順番でお願いします。なお、三人部屋の指名では、最初に指名された方がその部屋の三人目を指名する権利を有します。ではリョウタさん、どうぞ」

リョウタは坊主頭でシャツと半ズボン姿の少年キャラであった。いたずら好きそうな目をキラキラさせて、リョウタが口を開いた。

R 「そこのおじいさんでお願いします！」

B「ははは、おじいさんですか……」老人キャラのボスがいった。
B「では、もう一人の指名をさせていただきます。えーと、じゃあピイスケさん、よろしくお願いします」ボスは三人目の同居者にピイスケを選んだ。

P「はい、光栄です」ピイスケは地味な青年であった。着ている服もおしゃれ気が全く感じられず、いわゆる初期キャラともいえるような殺伐とした容姿であった。

M「ではお次は……、ドロシーさんですね。ご指名お願いします」

D「はい、じゃあ、 그레이さんでお願いします」

G「あつ、私ですか？ はい、えーと、もう一人指名しなけりゃいけませんよね。じゃあ、クイーンさんでお願いします」

ドロシーはチイよりちょっとだけお姉さん風ではあるが、ティーンエイジの雰囲気の子である。一方の、 그레이とクイーンは二人ともミュージシャン風の派手な服装で、重そうなメタルのアクセサリーをじゃらじゃらと身につけていた。 그레이のほうが少し大人っぽい雰囲気ではあるが、むしろ 그레이がクイーンをライバル視したために彼を指名したような感もあった。

M「じゃあ、次の順番の方は……？ ヒミコさんですね。指名お願いします」ミスズがうながした。

H「はい、ではシノさん。お願いします」

S「ええ、喜んで……。じゃあ、私はそのマントの方……にします」

F「えっ、私のことですか？ わかりました。フォックスと申します。光栄です」指名されたフォックスはいささか戸惑っていた。

ヒミコは背が高くモデルのようなグラマラス美人である。そして、シノさんと名のる女性は、ネットゲームでは珍しいおばあさんキャラであった。なんでも、リアルでもシノさんは五十代の専業主婦であるらしい！ フォックス氏は黒装束に身をつつんだ年齢不詳の男性である。人狼ゲームのキャリアは高いらしく、なにを考えているのか読めない人物だ。

M「お次は……。アイリスさんですね」

I「はい、じゃあ……。仲良しのチイちゃんがいいです」私は無事にチイを指名することができた。

C「はい、あいちゃんですね。光栄です」チイが嬉しそうにいった。私とチイはあえて広場で離れた場所に立っていた。念には念を入れておいたほうがいいという配慮からであった。

首尾よく事が運んで初日にチイと同じ部屋に宿泊することができた。同部屋に宿泊した人狼は、パスを消費せずに翌朝を迎えることができるのだ。このパスと呼ばれる行為は、全ゲームを通じて人狼は一回しか使うことが許されていない。

M「では、残ったお二人の、エリカさんとアメンボさんが同部屋です」ミスズがいった。

ここで初日の部屋割りをまとめておこう。

春の間… リヨウタがボスを指名して、ボスがピイスケを指名した。
夏の間… ドロシーが 그레이 を指名して、 그레이 がクイーンを指名した。

秋の間… ヒミコがシノを指名して、シノがフォックスを指名した。
冬の間… アイリスがチイを指名した。

松の間… 残ったエリカとアメンボが同居する。

平和な名も無き村に、いよいよ、恐怖の夜が訪れる……。

初日の夜

冬の間で私とチイはくつろいでいた。少なくとも今宵この部屋で事件は起こりようがない。とその時、仲間の 그레이 から秘密会話が送られてきた。

G「こちら、 그레이 です。今日の行動はどうしましょうか？」

C「祈禱師がいそうですね？」

G「いえ、全くわかりません。なにしろ、このクイーンという奴は

なにもしゃべろうとしないので……』

さもありなん……。私とチイは苦笑いをした。

C『ドロシーさんはどんな方？』

G『彼女は逆に堰を切ったようにべらべらとしゃべってきますね。やるなら、彼女かなあって感じがします』

C『お任せします』

G『了解です……』

ここで、グレイからのメッセージは途切れた。一分ほど経過しただろうか？

C『もしもし、グレイさん……。大丈夫ですか？』心配したチイがグレイに秘密会話を送った。

G『グレイです……。やばいです！ ブロックされました！』

C『誰にされたのですか？』冷静を装ってチイが訊ねた。

G『ドロシーさんです！ どうしましょうか……。？』グレイの戸惑っている声がした。

C『明日の会議で互いにブロックされたといい張るしかないと思います。まあ、私たち三人は協力することができますから、落ち着いて行きましょう』

G『わかりました。あーあ、初日から災難だなあ……。』グレイの声はぐったりとしていた。

ブロックとは人狼が牧師に噛みついた時に、牧師が抵抗することだ。ブロックは全ゲームを通じて一回しか宣言できないが、宣言すると人狼のその日の攻撃を牧師はかわすことができ、双方死なずに翌朝を迎えられる。この時、人狼のパスは消費されない。

二日目の出来事

二日目の朝

M「皆さん、よく眠れましたでしょうか？ 昨夜はなんと死者が一人も出ませんでした！ さあ、皆さん、お昼の議論に移ってください」

しばらくの間、誰も話し出そうとはしなかった。我慢しきれずにエリカが口を割った。

E「えーと、誰もしゃべらないようだから、私が進行役になるわよ。じゃあ、春の間に泊まった三名の方から昨晚の状況報告をお願いします」

B「はい、リヨウタ君もピースケ君もみんな良い子でした」

E「あんた、本当におじいさん役が嵌まっているわね……」エリカはボスを見ながら苦笑した。

R「はい、おじいさんのいうとおりですよ」

P「同感です」リヨウタとピースケの返事は素っ気なかった。

E「じゃあ、夏の間に泊まった三人のご意見は？」エリカが 그레이に目を向けた。

G「ええつとですね……」 그레이が、しどろもどろになった時だった。革ジャン姿のクイーン氏が、一歩前に踏み出すと、こういった……

Q「私はドロシーさんをブロックしました。彼女は狼です！」

思わず、私とチイは顔を見合わせていた。仰天の発言であった。

早速私は 그레이に確認の秘密会話を送った。

I『アイリスです。 그레이さんー、昨日ブロックしたって人って、ドロシーさんじゃなくて、クイーンさんだったの？』

G『いや、変だな……。確かにドロシーさんを襲ったつもりなので

すが……』グレイはまごまごしている。

I『そんな、あんたはつきりしなさいよ!』私はグレイをなじった。
C『待ってください。クイーンさんが偽ブロックを宣言したのかもしれない。ひょっとしたらチャンスかもしれないよ』チイが口を挟んだ。

クイーンの発言に広場の参加者たちもどよめいていた。ドロシーは真っ青になって硬直している。

D『そんなあ……、私がグレイさんをブロックしたんです!』ドロシーは大声をあげた。

E『なんか、わけわかんないけど……。グレイさん、なにかコメントある?』エリカが訊ねた。

G『はい、ドロシーさんは嘘をいっています! 私はドロシーさんを襲ってはいません!』グレイはきっぱりといい放った。広場は騒然としている……。

H『これじゃあ、三人の誰を吊るせばいいのか全然わからないわね』ヒミコがさり気なくいった。

その後も会議は続いたが、そのほかの宿泊所である秋、冬、松の間からは、平和だったという発言以外に、特にこれといった意見は出てこなかった。議論はもっぱら夏の間での三人の喚問に費やされたが、いずれも決め手に欠けたまま夕方の投票の時刻となった。

二日目の夕刻

M『では、本日の投票に入ります。投票の順番は今からサイコロを振って決めます。はい、決まりました。順番は……、アイリスさん、ピースケさん、シノさん、フォックスさん、ドロシーさん、グレイさん、リョウタさん、アメンボさん、エリカさん、チイさん、ヒミコさん、クイーンさん、ボスさんでお願いします。では、どうぞ』

ミスズが指示をした順番で、各人は投票をはじめた。

I 「はい、ドロシーさんに投票します」 私がいった。

P 「クイーンさんです」

S 「グレイさん」

F 「ドロシーさん」

D 「グレイさん」

G 「ドロシーさん」

R 「自分に投票です！」 リョウタがはきはきとした声で宣言した。

A 「クイーンさん」

E 「クイーンさん」

C 「ドロシーさん……」 チイは申し訳なさそうにドロシーを見つめていた。

H 「ドロシーさんよ！」

Q 「ドロシーさん」

B 「ボスに投票です」 老人は無関心な顔で答えた。

こうして十三名の投票が終了した。

M 「ドロシーさんが六票ですので、ドロシーさんを本日は集団暴力
リンチ
で処刑します！」

最初の犠牲者はドロシーだった……。

M 「続けて、二日目の部屋割りに移ります。指名の順番は、クイーンさん、リョウタさん、エリカさん、チイさん、フォックスさん、ヒミコさん、ボスさん、アイリスさん……でお願いします」

次は夜の宿泊相手を決めるイベントだ。二日目以降の部屋割りには、原則二人部屋で決めていく。さらに人数が奇数の時には、最後に残った三名が同じ部屋で泊まることになる。

Q 「では、フォックスさん。よろしくお願いします」 クイーンがフォックスを指名した。

F 「はい……」 この時フォックスは幾分ひきつった表情をしていた。

R 「僕はアメンボ兄さんでお願いします」 リョウタが無邪気にいつ

た。

A「はい、了解しました」アメンボも返事に覇気がなかった。

次はエリカの指名だ。E「チイさん……。よろしくね」

C「はい、よろしくですう」チイはニコニコしている。

H「私の番ね。じゃあ、 그레이さんを指名よ」

G「えっ、私ですか？」 그레이も意外そうな顔だ。

M「次の指名はボスさんですね。どうぞ……」ミスズがいった。

B「はい、じゃあ……。アイリスさんでお願いします」少し考えてから、ボスは私を指名した。

I「はい、よろしくです」私は返事をした。

M「部屋割りが確定しました。残ったシノさんとピースケさんが同居してください」ミスズがいった。

二日目の部屋割りは以下のとおりである。

春の間… クイーンがフォックスを指名した。

夏の間… リヨウタがアメンボを指名した。

秋の間… エリカがチイを指名した。

冬の間… ヒミコが 그레이を指名した。

松の間… ボスがアイリスを指名した。

竹の間… シノとピースケが同居する。

本日の死者は、ドロシー（集団暴力死）のただ一人。狩人たちの到着まであと残り六日である。

二日目の夜

松の間の扉をボスが開けた。B「さあ、アイリスさんどうぞお入りください」

I「はい……」私は虚ろに返事をした。というのも、私は悩んでいた。私にはまだパスが一つ残されている。パスをすることで、この老人を襲わないで今日は過ごせるのだ。ただ、パスを消費してしま

えば、次の日からは否が応でも同居人に噛みつかなければならなくなる。たとえ、その人が祈祷師だとしてもだ。だったらいっそのこと、今日この老人を襲ったほうがよいということなのか？ いや待て、アイリスよ。もしこの老人が祈祷師だったら、私はここでかえりうちにあって殺されてしまうぞ。ゲーム離脱となってしまう。果たしてこの老人は祈祷師なのだろうか？ 彼と昨晚いっしょに泊まった同居人は、ピスケとリョウタか……。あーん、だめだー！ ちっともわかんないよー……。

私がさじを投げようとしていた時だ、ずっと黙っていたボスが小声で話しかけてきた。

B「あのお、アイリスさん？ 今晩はいっしょに泊まれて光栄です」

I「えっ、そうですね……」なんの意味もない挨拶に私は恐縮した。

B「あの、アイリスさんは村側ですか？ えっと、私は村側なんですよ」

へー、この人、自分から村側だって宣言してきたよ……。真実かどうかはわからないけど。

I「はい、私は今回のゲームでは村側です」私は軽くうっちゃっておいた。

B「アイリスさん！」突然ボスの声が大きくなったので、私はビツクリした。

I「はい……。ごめんなさい。ちよっと考え事をしていたもんで」私は素直に謝った。

B「アイリスさん、実は今の僕は……。ゲームなんてどうでもいいんです！」ボスがいった。

I「はあ……。？」

B「アイリスさん。僕は前回のゲームで、貴女のりりしいお姿を拝見して、その、なんというか、貴女の聡明さと明るい笑顔にすこぶる惹かれました……。」ボスが一步步近づいてきた。

B「あの、アイリスさん……。僕は貴女のことが好きです。どうか結婚をしてください！」

なにをいつているんだ、この人は……。私の頭の中は混乱を窮めていた。I「あのお、結婚って、どういうことですか？」

B「ネット世界での結婚です。バーチャルとはいえ、ちゃんと仲間を集めて結婚式も挙げます。それから、新婚旅行もきちんとするし、結婚後は新居を購入して幸せな家庭を築くのです！」

I「……」

B「僕はこの世界ではかなりお金を貯めていますから、普通の人では購入することが困難な豪邸も買うことができます！ あっ、それから、もしこんな僕の老人キャラが嫌だというのでしたら、ご安心ください、いつでも貴女の好みのキャラに修正いたしますから。もともと、リアルな僕は今年の誕生日がやって来てもまだ二十九歳でして……。実はまだ二十代なのですよ、じいさんキャラはバーチャルの世界での仮の姿に過ぎなくて……」ボスはひたすらしゃべり捲くっていた。

やがて夜も終わりに近づいた時、人狼仲間から秘密会話が送信されてきた。

G『こんばんは。アイリスさん』

I『あっ、 그레이さん……』

G『どうしました、元気がないみたいですよ。ところで、同居人のボスさんはどうしました？』

I『うざかったので噛みました……。！』素っ気なく私は答えた。

G『ああ、そっ、そうですか……。』 그레이は返事に困っているようだった。

그레이は今度はチイに声をかけた。G『チイさんは今晚どうされました？』

C『はい、チイです。同居人のエリカさんですけど、不気味なくらい落ち着いていたので、噛むのは止めました。 그레이さんは？』

G『私も今晚は噛むのを止めました。ヒミコさんがひょっとすると仲間の狂人かもしれないと思ひまして……。』

I 『ヒミコさんが自分から狂人だといったの？』

G 『いえ、村側だと証言しました。ただ、昨日の投票で決め手を放ったのが、たしかヒミコさんでしたよね。だから、もう少し様子を見ておいたほうがよいと判断しました』

I 『昨日の集団暴力投票でヒミコさんが決め手を放った……？』

G 『あれ、気づかなかったんですか？ 昨日の投票を思い出してください。指名順で最初のアイリスさんから九人目のエリカさんまでは、各人が票を分散させようとしながら投票が進んでいます。つまり、そこまでは皆さんの行動は自然なのですよ。次のチイさんの投票は、私たちの立場として当然ですよ。問題は十一人目のヒミコさんの投票です！』

I 『なにか問題があるんですか？』

G 『大あります！ ヒミコさんの投票でドロシーさんの吊るし上げが確定してしまっただんですよ！ あの時、ヒミコさんは票を割ろうと思えばできたのに、そうはしなかった。この行為は妖狐や狂人が取りたがる類のものです』

I 『でもヒミコさんに、ドロシーさんが人狼でなかったことが判断できるかなあ？ まだ、情報が不足し過ぎてない？』私が疑問を投げた。

C 『私もそう思います。ヒミコさんは、あんまり考えないで、とにかく誰かを吊るし上げてくても票を投じた可能性が高いと思います。彼女は前回のゲームでも、人数を減らす行動が好きでしたよね』

I 『チイちゃんって、いつも冷静なのね……』私は感心した。

G 『じゃあ、今晚の結果ですが、私とチイさんがパスを消費してしまいました。アイリスさんにはまだパスが残っていますね。翌日の会議では、吊るしの候補者に私とアイリスさんがあがるでしょうか、ご協力お願いします』

C 『了解です』

I 『了解です』

三日目の出来事

三日目の朝

M「皆さん、おはようございます。昨晚の犠牲者ですが……」台上のミスズに、生き残った者からの視線が注がれた。M「クイーンさんと、ボスさんです。では議論をお願いします」

クイーンが死亡した！ クイーンは昨晚春の間でフォックスといっしょに泊まったはずだ。私は広場の中央に佇む黒装束のフォックスに目を向けた。

E「じゃあ、まず春の間で生き残ったフォックスさん——、弁明をどうぞ」今日も場を仕切るのはエリカであった。

F「皆さん、私は村側です。昨晚亡くなったクイーンさんは自殺です！ 恐らく初日に彼がいった言葉——すなわちドロシーさんをブロックしたという発言は、偽ブロックであります！」

G「あらあら、フォックスさん……かなり強くいっちゃったね」秘密の会話を通してグレイの声がした。

I「フォックスさんの発言は明快じゃない？」

G「明快過ぎるんですよ。だって、我々人狼からしてみれば、クイーンさんが狂人であることはすぐにわかりますよ。でも、普通の人にそこまではわからない。だから、そういう人たちからすると、逆にフォックスさんが狼のようにも思えてしまうんですよ」

I「なるほど。クイーンさんが狂人だという疑惑もあるけど、フォックスさんが人狼だという可能性も拭えないのね」

G「そのとおり！ だからこういう時には、もっと謙虚に訴えないとだめなんですよ。あれじゃあ、目立ち過ぎちゃって、私に集団暴力投票して^チくださいって宣言しているようなものですよ！」

C「グレイさん、狼プレーヤーの秘訣がわかってきたみたいですね」

チイがくすくす笑っている。

G『あはは、チイさんに褒められると……光栄だな。チイさん、私のことは下僕とお呼びくださいね』グレイが冗談をいった。

グレイの指摘どおりに、フォックスが狼ではないかという声が広場に殺到した。フォックスは必死に自己弁明に努めたが、まだゲームも三日目であり決定的な弁明の状況証拠をあげることができなかった。次に私の喚問がはじまった。

E「じゃあ、次は松の間のアイリスさん。ボスさんの死因を説明してください」意地悪そうにエリカが睨みつけてきた。

I「はい、ボスさんは狂人です。彼の死因は自殺であると思います」私はあっさりといった。

他の部屋での供述も簡単にまとめておこう。夏の間のリョウタとアメンボは、なにもなく平和な夜だったと語った。秋の間では、エリカが事件はなにも起こらなかったけど、チイが村側であるのかどうかは疑問があると発言した。チイは笑いながら聞き流していた。冬の間では、まずグレイがなにもなかったといって、ヒミコがそのとおりだと同意した。竹の間のピースケとシノの二人は、なにもなかったの一言を繰り返すだけだった。

三日目の夕刻

M「皆さん、夕刻の時刻です。会議を止めてください。では、三日目の投票の順番を発表します。リョウタさん、アイリスさん、エリカさん、シノさん、アメンボさん、ピースケさん、フォックスさん、ヒミコさん、チイさん、グレイさんの順番でお願いします。

いよいよ投票の時刻だ。今日の投票では、ずばり私かフォックス氏のどちらかが吊るされるであろう。さあ、私は生き残れるだろうか？

R「アイリスさんです！」最初の投票者であるリョウタが宣言した。

やはり来たか……。当然といえば当然だが、私はこのゲームではじめて死の恐怖を味わっていた。

M「アイリスさん。あなたの番ですよ」気がつくともミスズがうながしていた。

I「はい……。フォックスさんです」

E「私もフォックスさんね」エリカはフォックスに投票した。

次はシノばあさんだ。彼女は果たしてどちらに投票するのだろうか？

S「アイリスさんです」

ああっ、これで二対二だ……。私はがっくりと俯いた。

M「アメンボさん？ 投票をどうぞ」

A「はい、えーと、フォックスさんです」

アメンボはどっちでもいいやという感じだった。

P「フォックスさんです！」ピイスケがいった。

おお、やった！ これで私の二票に対して、フォックスが四票となった！

F「アイリスさんです」フォックスも今回は必死になっている。

H「私に投票します」ヒミコがいった。もう大丈夫だ！ 私は胸をなでおろした。

C「チイに投票します」

G「フォックスさんに投票です」

そう、最後の二人の投票者は実は私の味方なのだ……。

M「投票の結果、フォックスさんが集団暴力で殺されます」ミスズがいった。

私たち人狼チームは引き続き部屋割りのために相談をはじめた。

もちろん、会話は秘密モードを通して行われている。

G『いやあ、危なかったですねえ。でも、なんとかアイリスさん私も吊るされなくて済みましたね』

I『いずれにしても私たちは有力な容疑者であるのだし、油断は禁物です』私は気を引き締めた。

G『確かに。しかし、クイーンさんの行動はすばらしいですね。私

の失敗を助けて、フォックスさんを吊るし上げちゃったのだから』
グレイは興奮している。

C『狂人として、百点満点のプレーでしたね』チイも同意した。

I『今晚の部屋割りの作戦は？』

C『そうですね。現時点で私たち三人の人狼が生き残っているのは、とても順調なことだと思います。今日の部屋割りで、私たちの誰かが同じ部屋に泊まれるようだったらなりましょう。もう少し様子を見ることで祈祷師が浮かび上がるかもしれません』

G『でも、そろそろ噛んでいかなないと村人側の全滅って限りなく遠いと思いますけど……』

I『そうよ、そうよ。暴力賛成！』私も同意した。

C『ですね。でも、あと一日はゆとりがあるものとして行動できます』チイには彼女の計算があるようだ。

G『それに、そろそろ我々の正体もばれてしまいます。人狼はパスが一回できるので、二日目までは参加者全員に人狼の嫌疑がかかります。しかし三日目になると、三日とも同居人に死者が出なかった人物は、人狼ではあり得ないことになってしまいますよね。今晚、めいっばい殺しておかないと、多くのプレーヤーが人狼の嫌疑から外れてしまいますよ！』グレイが強い口調でいった。

C『そこがあと一日のゆとりに関係しているんです』チイは落ち着いていた。

I『あと一日のゆとり……、どういうこと？』私が首を傾げた。

C『妖狐の存在です！』

I『ああっ、そうか。たとえ三日とも同居人に死者が出なくても、まだ人狼である可能性があるんだ！』私は叫んだ。

G『おお、そうか。一日はパスをして、一日は人狼同士で宿泊して、さらに一日は妖狐に噛みついた！妖狐は噛みつかれると狂人化するから、翌日の会議で狼をブロックしたとは宣言しない！』

I『妖狐さんって、奥が深いのねー』しみじみと私がいった。

C『そうですね……。あっ、あいちゃん、今の発言ちよっと天然入

ってるかも……』チイが笑っていた。

G『じゃあ、我々はもう一日じっくりと人物観察をしてもいいんですね』グレイも頷いた。

C『あくまでも、ゆとりがあるということです。もちろん、一気に攻撃するという選択もあります。臨機応変にいきましょう。それより、私たちの当面の敵は村人たちではありません!』

I『えっ、につっき村人以外にどんな敵がいるっていうの?』

C『あいちゃん、役になりきっちゃってますね……』チイが苦笑いをした。

G『当面の敵とは、妖狐のことですね』グレイが冷静な口調でいった。

C『そうです。私たち三人はまだ妖狐に噛みついていません。妖狐がすでに死んでいる可能性もわずかにはありますが、依然として妖狐として生き残っている可能性がずっと高いです。村人の全滅よりも優先されるのが、妖狐が誰であるかを知ることです!』

G『どうしたら、妖狐を見つけ出せるんですか?』グレイは考えこんだ。

I『噛むしかないよね……』

C『まあ、そのとおりですね。ですから祈祷師と妖狐の行方を絞り込むことが、当面の大事だと思います』

I『了解です』

G『了解です』

C『あっ、それから私とグレイさんはパスを消費しちゃいましたが、あいちゃんはまだパスを消費していません。もしも、私とグレイさんとあいちゃんの間で誰かが犠牲にならなきゃならない場面に出くわしたら、あいちゃんを生かす方向で協力しましょう』

I『チイちゃん……。ううっ、ありがとう……。』

C『あっ、あいちゃん。今のは勝つための単なる作戦ですから……。あっ、鼻水が出ちゃってますよ……。』

G『お二人のその天然ぶりが中年男性の心をときめかせるんですよ』

ね……』しみじみとグレイがいった。

M「では、三日目の部屋割りに入ります。指名順は、アメンボさん、ピースケさん、エリカさん、チイさん、シノさん、グレイさん……でお願いします」

A「では、ピースケさんでお願いします」アメンボが指名すると、P「よろしくです」ピースケが答えた。

E「次は私ね。えっと、リョウタ君でお願いするわ」エリカは坊主頭の少年を見つめた。

R「エリカ姉さんですね。よろしくお願いします」リョウタは少し緊張気味だ。

C「じゃあ、あいちゃんを指名します」チイはあっさりといった。

I「はい、喜んで」私も素っ気なく応対した。これで、今晚も一安心だ……。

M「はい、では残りのシノさん、グレイさん、ヒミコさんのご三人が同居となります」ミスズが宣言した。

三日目の部屋割りは以下のとおりである。

春の間… アメンボがピースケを指名した。

夏の間… エリカがリョウタを指名した。

秋の間… チイがアイリスを指名した。

冬の間… シノとグレイとヒミコが同居する。

本日の死者は、ボス（夜間死）、クイーン（夜間死）、フォックス（集団暴力死）の三人だ。狩人たちの到着まであと残り五日である。

三日目の夜

今日の部屋は秋の間か……。私とチイは部屋に入ると扉をしつかりと閉めた。

C「さて、ここまでは順調ですね」

I「そうね。順調すぎて怖いくらい……」

C「少なくともここまでの展開で、私たち人狼三人はダメージを受けていません。一方、村人側は明らかに牧師一人を失っています」

I「ドロシーさんのことね」

C「はい、でもまだ安心をしてはいけません。このくらいで実は互角なんです」

I「そうなんだ。ところで、チイちゃん。残った人の職業はわかる？」

C「そうですね。まず、職業の人数を確認してみましょう。今日のゲームの参加人数は十三名ですね」

I「呪われた人数だね！ あたしらに追い風かも……」

C「はい……。そして、人狼が私たち三人、それに妖狐が一人、いることがわかっていきます。妖狐を除いた十二人を半分に分けるとそれぞれ六人ずつ。恐らく村人側と人狼側が六人ずつだと思われます」

I「そうじゃないってことがあるの？」

C「うん、場合によっては村人側が七人で、人狼側が五人という可能性もありますね」

I「そんなあ、ずるいよー！」

C「ははは……。えと、人狼側は仲間同士でテレパシー会話が許されているし、さらに妖狐を味方にするという可能性もあるので、村人側よりかなり有利だと解釈されているんです。だから七人と五人の可能性もあり得ます」

I「微妙なところなのね……」私は納得した。

C「そして、人狼が三人であるので、ほぼ間違いなく村人側の祈禱師と牧師は合わせて三人いますね！ 祈禱師二人、牧師一人かまたは、祈禱師一人、牧師二人のどちらかだと思います」

I「そのうち、牧師が一人死んでいるから、祈禱師二人かあるいは、祈禱師一人と牧師一人が生き残っているのね」

C「はい、ひょっとすると集団暴力の犠牲者のフォックスさんが祈

禱師や牧師である可能性はありますが、とりあえずそのような樂觀的な可能性は捨てておきましょう」

I「フォックスさんが妖狐である可能性は？」

C「だとうれしいんですけどねえ……。もちろんその可能性はあります。妖狐族はすでに息絶えているのかもしれない」

I「きっとそうだよ。なにしろフォックスさんっていうくらいだから……」

C「あー、あいちゃんもそう思いましたかー。私も実はねー。はっ……。こほん、そういう樂觀的な考えは捨てておきましょうね」
チイは一瞬取り乱したものの、すぐにまた冷静さを取り戻した。

I「えーと、そのほかの死者はークイーンさんは狂人に決まりだし、ボスさんは村人か狂人か霊能者に間違いないよね」

C「あっさりとあいちゃんに殺されちゃいましたからね……」チイがくすくす笑っている。

I「だったら、フォックスさんが祈禱師、牧師、妖狐のいずれかであった確率は8分の3だね！」

C「あいちゃん、計算速いですね」

I「えっへん、こう見えても私中学の時、一番の得意科目は数学だったのよお」

C「へえ、そうなんだー。私はどっちかというと理数系は苦手で、むしろ国語のほうが好きでしたね。数学だけはいつも評定が4になっ
てしまいましたから……」

I「へっ、私も数学の評定はいつも4だったんだけど……」

C「……」

I「……」

夜がしらしらと明けてきた。

I「はっ、もう朝だよ！」

C「えっ、本当だ！　 그레이さんどうなっちゃったんだろう？」

I「あらら、 그레이さんのことすっかり忘れてたね。 あたしたち……」

C「そっ、そうですね……。ははっ……」

四日目の出来事

四日目の朝

なによりも 그레이の安否が心配だ。私とチイが集合場所に駆けつけた時には、すでにみんな集結していた。ミスズがゆっくりと台上にのぼった。

M「昨晚の犠牲者を報告いたします。冬の間のヒミコさんです。では、会議に入ってください」

私は広場の中央に 그레이の姿を見つけた。ほかの参加者たちに気づかれないようにして、 그레이に秘密会話を送信した。

I『もしもし、 그레이さん？ アイリスです』

G『ああ、 アイリスさん。おはようございます。 昨晚の冬の間にですが、 私はヒミコさんに噛みつきました』

I『 그레이さんはパスができないから、 どちらかの同居人に噛みつかなきゃならないもんね……』

G『はい、 ヒミコさんは味方の狂人かもしれませんが、 シノさんがひよっとして祈禱師かもしれないとも思いまして、 悩んだ末にヒミコさんを襲うことにしました』

I『結局、 上手くいったじゃない？』

G『さあ、 どうでしょうか？ もし、 ヒミコさんが狂人だったら、 我々は貴重な同士を失ったことになりますし……』

I『気にしない、 気にしない……』 私は 그레이を慰めた。

G『ところが、 それで事は終わらなかったんですよ！』

I『えっ……、 一体なにが起こったの？』

G『それがですね、 私が襲ったために冬の間にはヒミコさんの死体ができただけですよね』

I『うんうん』

G『当然、 もう一人の同居人であるシノさんも、 ヒミコさんの遺体

を目撃するわけですよ』

I 『仕方ないわね。だったら次はシノさんの口を封じないと……!』

G 『相変わらず過激ですね……。そしてその時、シノさんは私に奇妙なことを告げたんです』

I 『シノさんはなんて?』

G 『遺体を確認したシノさんは、私のほうを向いてこういいました。私はあなたの味方ですよー、と……』

四日目の会議が現在進行中だった。

E 「犠牲者のあった冬の間のシノさんと 그레이さん――、それぞれ弁明をお願いします。そうね、まずは 그레이さんから……」 エリカは 그레이に声をかけた。

G 「はい、ヒミコさんは狂人で自殺しました」 間が悪そうに 그레이は答えた。

E 「はいはい、自殺ね……。じゃあ、次にシノさん、なにかいいことある?」

S 「 그레이さんのいうとおりです。ヒミコさんは明らかに自殺です」

A 「明らかに……とは、どういうことですか?」 アメンボが割りこんできた。

S 「だって、 그레이さんも私も自殺だと思ったんですよ。だから、あれは明らかに自殺なんです!」

A 「はいはい、よくわかりました……」 アメンボはがっかりした様子だった。

P 「 그레이さんの部屋では、確か初日にも事件が起こっていましたがよね」 今度はピースが発言した。

G 「はい、あれは多分クイーンさんが牧師だったんじゃないかと……」 그레이はあいまいに答えた。

E 「ふむ、クイーンさんが牧師で、ドロシーさんが狼だったと……。牧師にブロックされたドロシーさんは集団暴力で吊るされて、さらに能力を失ったクイーンさんは翌日に人狼のフォックスさんに噛ま

れて亡くなったということね。一応筋は通っているわね……」

C「その推理が正しければ、狼さんはすでに二名が死亡していることになりますね」チイが納得したように呟いた。

E「確かにそうなるわ。じゃあ、あんたなの？　あと一人の狼は？」意地悪そうにエリカがチイを睨みつけた。

C「そんなあ、滅相もないですう」チイは慌てて両手を振った。

I「そうよ。チイちゃんは昨日も私といっしょに平和に過ごしたんだから！」思わず私ものり出してしまった。

E「ふふふ……。アイリスさん、それってあなたとチイさんが二人とも狼ですよって宣言していることにならないかしら……」エリカの口元が緩んだ。

S「そうしたら、狼が全部で四人になってしまいますね」シノが冷静にエリカの論点の矛盾をついた。

E「なるほどね。そのとおりだわ……。シノさんってなかなか鋭い人なのね」エリカは笑っていた。

P「 그레이さんの証言は矛盾していませんが、別の解答もありますよね。実に単純な解答が……。それは――、 그레이さんが人狼だという解答です！」今度はピイスケが一步前に出た。

R「 그레이さんが人狼だとどうなるの？」あどけない表情でリョウタが訊ねた。

P「 그레이さんが人狼ならば、初日の夏の間で嘘をついた人物は誰になるのだろうか？　そうです、ドロシーさんは真実をいつていた！　彼女の正体は牧師だった。 그레이さんは狼で、ドロシーさんに噛みついた！」

E「それじゃあ、おかしくない？　クイーンさんも嘘をいつていたことになっちゃうよ？」エリカは首を傾げていた。

P「そうです！　クイーンさんは狂人だったのです！　彼こそが俺たちを混乱のどん底に落としこんだ張本人なのです！」

I「じゃあ、フォックスさんは無実の罪を着せられて……？」私は論点を逸らそうと努めたが、残念ながらこの状況は打破できるもの

ではなかった。

P「そうです!」

E「ちょっと、無理がない? だって、あの時の会議では、夏の間
に泊まった三人の中でクイーンさんが最初に発言したのよ! 自分
がドロシーさんにブロックされたって……」

P「確かに悪魔的なタイミングでしたよね。おそらく、一か八かの
大博打の発言であったと思います」若干苦しそうにピースケはいっ
た。

E「ふーん、そうなんだ。じゃあ、そろそろ時は熟したのかもしれ
ないわね。私から一言いわせてもらおうわ……」エリカは集団の中央
に足を運んだ。E「紳士淑女の皆さん、私ことエリカは今回のゲー
ムでは村人側に所属しています! ただ今のピースケさんの発言に
よって、初日の夏の間で起こった事件の解明こそが真相究明の鍵に
なることがわかりました。そして事件の真相は、次の二つの可能性
しかありません! 一つはドロシーさんが人狼で、クイーンさんが
牧師だったという可能性――、もう一つは、グレイさんが人狼で、
ドロシーさんは牧師、クイーンさんは狂人という可能性です。さあ、
どちらが真実なのでしょう?」

S「残念だけど、現時点でそれを判断する手立てはありませんよ」
シノがポツリといった。

E「そうかしら? 皆さん、この真相を解明できる人物がこの中に
いるはずですよ!」

P「それは誰ですか。まさか、人狼たちだっという落ちは止めてく
ださいね」ピースケが興味深げに訊ねた。

E「ふん……。この中に霊能者がいるでしょ! さあ、今ここで名
乗り出なさいよ。霊能者には集団^{リンチ}暴力の犠牲者の職業が、翌日にな
るとゲームマスターから知らされるわ。だから、ドロシーさんとフ
ォックスさんの職業を知っているはずなのよ!」

P「そうか! 霊能者が生き残っていれば、夏の間で起こった事件
の真相を知っているはずなんだ!」

E「霊能者は村人側の職業よね。だから、人狼を吊るし上げるためにここで名乗り出て発言してちょうだい！」

まずい！ 思わず私は天を仰いでいた。もしも、エリカのいうとおり霊能者が名乗り出てしまうと、私たちの正体もばれてしまうかもしれない！

P「霊能者がまだ生き残っている可能性はあるのですか？」

E「恐らくね」

P「なにゆえにですか？」

E「ふん、妖狐の存在は村人側からしてみるととても厄介な存在よ。だから、最初の十三人の中に、恐らく霊能者は二人いたと思われるわ！」

P「えっ、一人だけじゃなくて二人……！」

E「そう、どう考えても初期の霊能者は二人であることが一番バランスもいいわ。だから、どちらかの霊能者がまだ生きている可能性は十分に考えられるわ！」

A「エリカさんのいうことはもったもですが……、村人の敵は狼だけではありません！」突然、アメンボがエリカを制した。

E「なにつ、それ？ まさか狂人もつていいたいの？」エリカはムッとしていった。

A「いえ。第三勢力の妖狐です。霊能者の最大の任務は妖狐の殺害です！ わざわざ名乗り出て人狼のターゲットになってしまつては、肝心の妖狐殺しが成し遂げられなくなるかもしれません。ここは、名乗り出さずにじっとしていることも肝心なのかと……」

E「じゃあ、今は出てこれないってこと？」エリカは残念そうだった。

S「ふふっ。そういうエリカさんが霊能者だったりして……」シノが皮肉っぽく口を出した。

P「あるいは妖狐なのかもしれませんね。妖狐こそ、なにをおいても霊能者を恐れる存在ですからね」ピイスケも追隨した。

E「はいはい、どうとっていただいても結構よ。いずれにしても今

日の投票のターゲットが、お二人のどちらかであることは決まりな
んだから……」最後にエリカは、グレイとシノのそれぞれに一瞥を
くれると、捨て台詞を吐いた。

M「はい、会議の時間は終了です。皆さん、投票の準備をしてく
ださい」ミスズの声が響いた。

四日目の夕刻

なんとしても仲間のグレイを助けなければ、でもどうやって？

私は混乱していた。

M「では、投票の順番を発表します」

この順番は運命を左右する！

M「順番は……、エリカさん、チイさん、アメンボさん、グレイさ
ん、リョウタさん、シノさん、ピースケさん、アイリスさんの順番
です。ではどうぞ」ミスズはエリカに目を向けた。

E「グレイさん！」エリカははっきりと宣言した。

C「シノさん」

A「グレイさん」

G「シノさんです……」

ここまでは票が割れても仕方がない。さあ、次のリョウタはどっ
ちに投票するのだろうか？

R「エリカさん！」

一瞬、ざわめきが起こったが、リョウタの投票は実質パスのよう
なものだ。

S「グレイさんに投票します」

これもシノさんが我が身を守るための当然の一票といえる。しか
し、このままでは……。

P「グレイさん」

ああ、これでグレイの集団暴力死が確定してしまった……。

I「グレイさん……」私は小声でいった。

M「はい、それでは、グレイさんが五票ですね。本日の集団暴力の犠牲者はグレイさんです」ミスズが宣言した。

リンチ

M「続きまして、四日目の部屋割りを決めます。順番は、リョウタさん、エリカさん、アメンボさん……の順番でお願いします」

R「では、アメンボさん。また、よろしくです」リョウタが指名した。

A「ああ、またですね……。お願いします」アメンボが答えた。

E「じゃあ、私もまたチイさんにするわ」エリカはチイを指名した。

C「はい、お願いします……」チイは無表情で答えた。

M「では、残りはアイリスさんとシノさん、そしてピースケさんですね。では、各部屋に移動してください」ミスズがいった。

四日目の部屋割りは以下のとおりである。

春の間… リョウタがアメンボを指名した。

夏の間… エリカがチイを指名した。

秋の間… シノとピースケとアイリスが同居した。

本日の死者は、ヒミコ（夜間死）、グレイ（集団暴力死）の二人だ。生き残っている人狼の中で、アイリスはまだパスが一回残っているが、チイはもうパスをすることができない。狩人たちの到着まであと残り四日である。

四日目の夜

そろそろゲームも中盤にさしかかっただろうか？ 秋の間は三人部屋だ。一見、地味そうな老女キャラのシノと、これまた地味な初期キャラのピースケだが、二人とも鋭い推理力を先ほどの会議では披露していた。決して油断はできない……。

I「こんばんは。アイリスです。よろしくね」私から挨拶を試み

た。

S「シノと申します。よろしく」

P「ピースケです。ところで、シノさんは村人側ですか？」ピースケは単刀直入に質問をしてきた。

S「もちろんですよ。あなたは？」優しい声でシノがいった。

P「俺はその、狂人かもしれませんよ。ははは、正体は秘密にしておきます。ところで……、アイリスさんは人狼ですよね！」突然、ピースケがふってきた。

I「えっ……」あまりの強烈な質問に、私は言葉に詰まった。

P「あれれ？ 本当に人狼なのですか？」ピースケは嬉しそうだっ
た。

I「そんなことないですよ！」私は必死になって否定した。

P「ふふふっ……、実は俺は狂人なのです！ アイリスさん、狼なら隠さずに正直にいつてくださいよ」ピースケが近寄ってきた。まさかこんな展開になるなんて……。

I「たとえ、私が人狼だとしても、この三人部屋で真実を話すわけがないじゃないですか！」このような発言をすること自体、私が混乱していた証拠といえよう。

P「大丈夫ですよ。ここにはあなたの食料となるべきおばあさんもお見えになりますし……」ピースケは冷酷な視線をシノに向けた。

S「ふふふっ……。そんなこといっても、肝心のアイリスさんは狼じゃありませんよ」シノが妙に落ち着きはらっていた。

I「そうです。私も村人側の人間です！」ようやく冷静になった私はピースケに向かってはつきりといひ放った。

P「そうですか！ 俺はアイリスさんが妙に落ち着いているから、てつきり人狼だと推測したのですがね……。普通の職業の方なら四日目の夜なんて、びくびくしているのが普通ですが……」ピースケも議論では負けてなかった。

ちょうどその時、チイから秘密会話が送られてきた。

C『あいちゃん、チイです。いよいよ、エリカさんを襲います。で

も、私の直感ではエリカさんは祈祷師のような気がします。もしも、私のこの通信が途絶えたら、その時は、あいちゃん……、後を頼みますです』

I 『チイちゃん、そんなこといわないで。私、明日の広場で待っているから……』私はチイを慰めた。

C 『はい、じゃあ、いつてきます!』

I 『健闘を祈ります』私はいった。

一分の間、チイからのメッセージは来なかった。心配した私は、チイに交信を出した。

I 『もしもし、チイちゃん、聞こえる……?』
返事はなかった……。

I 『チイちゃん。チイちゃんってば……?』

五日目の出来事——前編

五日目の朝

結局、昨晚の私は同居人を襲わなかった。すなわち、私のパスは消費されてしまった。したがって今日以降、私は否が応にも同居人を噛まなければならなくなったのだ。朝の広場にチイの姿はなかった。そして、そこにはチイと同居したエリカの姿があった！

M「それでは、昨晚の犠牲者のお名前を申します。リョウタさんとチイさんのお二人です！」

実にあっという間であった。あれだけ有利だった人狼チームはもはや風前のともし火で、私一人を残すのみとなってしまった。しかも、私のパスはもう残っていない！ 広場にいるほかの生き残りのメンバーに私は目を移した。おしゃれで活発な女性のエリカ、スマートな青年のアメンボ、一見穏やかな老女シノ、見かけは地味だが行動は大胆な青年ピイスケ……。果たして彼らの正体は？

エリカだけは断言できる。彼女は能力を使い果たした祈禱師だ。襲えば即座に殺すことができる。でも、他の三人の正体は？ 全くわからない……。私は途方に暮れていた。

とにかく、これまでの参加者の行動からなにか手がかりを探ることが出来るはずだ！ 私はもう一度ノートに目をおすことにした。M「生き残りの皆さん？ お昼の会議の時間に入っていますよ。なにか議論をしてください」 私たち全員が考えこんでいるので、心配したミスズがうながした。

E「仕方ないわね。じゃあ、弁明は……、私からいくわね。チイさんは狂人よ。彼女は自殺したわ！ 以上！」 エリカはぶっきらぼうにいった。

A「では、僕の番ですね。僕の部屋でもリョウタさんが亡くなりました」

E「そうよね、一体死因はなんだったのかしら？」エリカが質問した。

A「霊視で殺しました！ リョウタ君の正体は妖狐です！ そして、僕は霊能者です！」

アメンボの驚くべき発言には、さすがにどよめきが起った。もし、本当にリョウタが妖狐であれば、第三勢力はここで途切れたことになる。あとは人狼と村人の間の決着を残すのみだ！ しかしアメンボの発言はどこまで信用することができのだろうか？

E「ちよつと待ってよ。アメンボさん——あなた、自分が霊能者だっていったけど、じゃあ、初日の夏の間における事件の真相を知っているってことよね！」

A「もちろんです。もう妖狐は死に絶えました。だから、僕は村人側として人狼たちと戦うだけです」

E「そう……、なら教えてもらおうじゃないの！ さあ、夏の間で起こった事件の真相をいいなさいよ！」エリカが問いつめた。アメンボは落ち着き払っていった。

A「では、申し上げます。ドロシーさんは……、牧師でした！」

やられたと、私は思った。アメンボはどこまで真相を知っているのだろうか？

P「ふむふむ、ドロシーさんが牧師ということは、 그레이さんは狼で、クイーンさんが狂人なのですね」

A「そのとおりです！ そして、フォックスさんは……、狂人でした！」

P「はははっ、こりゃ傑作だ！ クイーンさんは狂人の目の前で自殺をしてしまったんだ！」ピースケが大声をはりあげた。

A「クイーンさんは結果として失敗していますが、作戦としてはすばらしかったと思いますよ」アメンボがフォローした。

S「じゃあ、狂人が二人も亡くなっているということは、私たち五人の職業構成は一体……？」珍しくシノが動揺していた。

A「妖狐は消えました。僕たち五人のうちで職業がはっきりしてい

るのは、僕が霊能者であることのみです。そして、残った四人の方々のうち、どなたかは恐ろしい人狼です!」

P「人狼が二人生き残っている可能性は……?」ピイスケがいった。

E「それはないわ!」即座にエリカが断言した。

A「ふふふ、とすれば、僕たち五人の構成ですが、村人側が三人で人狼側が二人ということになりますね」

P「なぜ、断言できるのですか?」ピイスケが問いかけた。

A「今回のゲームの参加者は十三名。その中に三名の人狼がいました。人狼側の人間が最初から過半数の七名以上いることはまず考えられないので、必然的に狂人は三人までしかいないはずです! だから、すでに狂人は二人が死に絶えていますから、残りはたったの一人。その人も生き残っているのかはつきりしません。いずれにせよ、人狼側の生き残りは多くても二名だということです!」アメンボは鋭い推理を展開した。

E「そうね。だったら、私たち村人側が勝利を収めるためには今後どう行動したらいいのかしら?」

A「エリカさん……、僕はまだあなたが村人側であると認めてはいませんよ。まあ、それはさておき、村人側が勝利を収めるためには、人狼かまたは狂人を集団暴力で殺すことが確実だと思います」アメンボが冷たく笑った。

E「なるほどね。よくわかったわ。それじゃあ、次の質問よ……。

私たちの中にたった一人だけ生き残っている人狼は……、一体誰なのさ!」エリカは強い口調で訊ねた。

A「さあてね、それを推理するのは皆さんのお仕事じゃないんですか?」アメンボはあっさりとかわした。

混乱と恐怖のために、私はなにもしゃべることができなかった……。

M「皆さん、五日目の会議は終了です。では、夕刻の投票に移りましょう」ミスズの透き通った声が、名も無き村の集会場に木霊した。

M「投票の順番を申し上げます。シノさん、ピイスケさん、エリカさん、アメンボさん、アイリスさんの順番で投票をお願いします」
ミスズが発言した。

私の心臓はバクバクと音をたてていた。大丈夫よ、アイリス、あなたが吊るされることはあり得ないわ。なぜなら、昨晚同居人が死んだ人物は、アメンボとエリカの二人もいるのだから……。自分にこういう聞かせてみたものの、不安な気持ちを解消することはできなかった。

シノが一步前に進み出た。

S「エリカさんに投票します」シノははっきりと発言した。
続いてピイスケがいった。

P「アイリスさんです！」

ええっ、なんで、私が……？ 私は事実を受け入れることができなかった。

エリカが前に出た。

E「アイリスさんよ」エリカは勝ち誇ったようにいい切った。

そして、アメンボが出てきた。彼が私の名前を宣言すれば、その時点で人狼側の敗北が確定する！ 絶体絶命……。私は目を閉じてアメンボの発言を待った。

M「アメンボさん？ どうぞ、投票をしてください」

アメンボは長い間考えていた。やがて、大きく一呼吸すると彼はいった。

A「僕は……、エリカさんに投票します！」

場内がどよめいた！ とにかく、私は一命を取り止めたのだ。私は一步前に進み出た。

I「エリカさんに投票します！」

M「はい、以上で投票は終了です。本日の集団暴力の犠牲者はエリカさんです！」

エリカは呆然と立ち尽くしていた。彼女は硬直してしゃべることができなかった。生き残った四人の影が可哀相なエリカの周りをゆ

つくりと取り囲んだ。やがてミスズが合図の一声をあげると、四人の輪が中央のエリカに向かって縮まった。おぞましき集団暴力が執行されたのだ！
リンチ

五日目の夕刻、そして――読者への挑戦

安心したのか私の思考は少しだけ冷静になってきた。すると……、そうか！　なんで今まで気づかなかったのだろう。ここに来て私は、ノートの中に潜んでいた重大な事実を発見した。もちろん、それだけで全ての真相が解明できたわけではないが、少なくとも真相の究明のための極めて重要な手がかりを私は得ることができたのだ。しかし、これで……果たして間に合うのだろうか？

M「さあさあ、生き残りは遂に四名になりました。では、部屋割りの順番を決めますね。ええと、最初がアイリスさん、そして、シノさん、アメンボさんの順番です。――ああっ、そうか。残りは四名ですから、アイリスさんが指名しちやえば部屋割りは確定ですね。それでは、アイリスさん、ご指名お願いします……」

やった！　私は4分の1の確率を征して、部屋割りの指名権を得た。これは恐らく最後のチャンスであろう。私は三人の人物から今晚の同居人を一人だけ指名することができる。三人は、アメンボ、ピイスケ、そしてシノである。私は昨晚ピイスケ、シノと同居しているが、その時は三人部屋であり、今晚は二人部屋となるため、ピイスケ、シノを今晚の同居人として指名することは許されている。すなわち、私はアメンボ、ピイスケ、シノの三人の誰を指名してもかまわないということだ。そして、この三人はいずれも高い推理力を持った人物であることが、これまでの彼らの発言からも感じられる。

私にはもうパスが残されていない！ 私は盲目的に同居人に襲いかかるしか選択肢はない。果たして、私が選ぶべき同居人は誰だろうか？

さて、ここで読者の皆さまへの出題です。この五日目夕刻の部屋割り指名で、私が選ぶべき最善の人物は誰でしょう？

- (1) アメンボ
- (2) ピースケ
- (3) シノ

私は人狼側の勝利を目指しています。ゲーム終了時刻は八日目の夕刻、つまり八日目の集団暴力が行われるまでとなります。

五日目の出来事——前編（後書き）

「続、小説・人狼ゲーム（出題編）」をお読みいただきまして、ありがとうございます。出題編は「読者への挑戦」の章までで終了とさせていただきます。このつづきは、「続、小説・人狼ゲーム（解決編）」にて公開いたしますので、お楽しみに。

ただ、解決編はただ今執筆中で、なるべく早く公開できたらと思っています段階です。いましばらくご迷惑おかけいたしますが、解決編もぜひお読みいただけたら、作者としてはこの上ない喜びであります。今後ともよろしくお願いいたします。

i r i s G a b e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7187k/>

続、小説・人狼ゲーム（出題編）

2010年10月9日09時57分発行